
青い鳥と白い鳥

由愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い鳥と白い鳥

【Nコード】

N3719T

【作者名】

由愛

【あらすじ】

小さな村の小高い丘で、一人の少女と白いハトが、幸せについて考えていました。

（前書き）

初めて投稿させていただきます、由愛と申します。

至らないところ多々あると思いますが、宜しくお願い致します。

小さな村の小高い丘に、金色の髪の少女と白いハトが並んで座っています。金髪の少女は鮮やかなピンク色の頬をぱんぱんに膨らませて、むくれているようです。白いハトは遠くのほうを、じっと眺めていました。

少女はしばらくすると口の中の空気を出して、ぐんと背伸び。

「あーあ、ハトはいいわね。気楽で綺麗で楽しそう。あたしもハトになりたかったわ」

そして、眉間にしわをぐっと寄せました。

「人間なんて、結婚相手も勝手に決められたりもう決まっていたり結婚式が明日だったり！ あたしはまだ十六なのにな」

そして、やわらかい芝の上にごろんと寝転びました。その心地よさに少女の表情は少し和らぎます。

ハトは少女のほうを一度じっと見据えてから、クルルと鳴きます。「人間のほうがいいと思うよ。あたしやこうやって今も生きているけど、同じ白い羽の奴にあつたことなんか一度も無いね！ 一度でいいから拝んでみたいものさ」

「いーじゃない、仲間なんていなくても」

「なにいつてんだい。そんなことは、仲間がいるからこそ言えることさ」

そして、しばらく風の音だけが流れました。

少女は勢いをつけてまた座った体勢に戻って、それからハトの方を向きました。

「仲間はいいかもしれないけれど、家族は嫌よ。だってママもパパもうるさいんですもの」

すると白いハトはため息を交えながら、

「それはあんたの為に言ってるんだろう？ 結婚相手だってそうさ。

ぜーんぶ、あんたを愛しているからこそのおせっかいなんだよ」と話しました。

「そのおせっかいが嫌なのよ!」

少女はまたむくれてそっぽを向きます。つーんとすました顔。でもその格好もだんだん疲れたみたいで、やめました。

「……青い鳥って、この近くにいないかしら?」

「何言ってるんだい?」

唐突に少女がつぶやいたことに少々驚きながら、ハトは聞きます。「ほら、メーテルリンクの『青い鳥』。夢の中で幸福の象徴を主人公が探しに行くの。でも、結局は自分達に最も手近なところに青い鳥はいたっていうお話よ。小さい頃このお話が大好きで大好きで!よく読んでいたわ」

そうすると、懐かしそうに女の子は目を細めます。

「あの頃はパパもママも優しくて。一緒に遊んでくれていたのに」

突然、ハトが羽をばたつかせてきました。驚いた少女はハトの方を向きます。そこでハトは一言。

「言っておくけど、青い鳥は、あたしたちハトだからね」

「……え?」

「やっぱり知らなかったのかい。そりゃあ、種類もあたしゃとは全く違うけど、あれは確かにハトだよ。つまり……」

ここで一区切り、ちゃーんと置いて。

「あたしが、青い鳥の役目ってことで、いいじゃないかい」

すました顔で、そうはつきり言いました。

「一度、都市の方へ行ってごらん。あんたの知らない世界がたくさん広がっているだろうからさ」

ハトの告げた言葉に一度は目を輝かせたものの、少女は戸惑いの表情を見せます。

「でも、パパやママが心配するわ……」

「なーに言っているんだい。素直に自分の心に聞いてみな。あんた

の両親なら心配ないよ。始めはショックを受けるかも知れないけれど、きつといつか分かってくれる」

その時、大きな風が吹きました。少女の金色の髪が、揺れていきます。

「それにね、あたしは、代わりといえど、幸福の象徴だ。少しくらい、信じてくれてもいいじゃあないか」

風が止むと同時に、少女が立ち上がりました。そして、丘を駆け下り、何処かへと走っていきます。少女自身、今からどうしようかなど考えていません。ただ、何かを変えようと、走っているのです。ぽつんと丘に残された白いハトは、やわらかい笑みを浮かべます。「白いハトってのは、平和の象徴になっているんだだけだね。まあ、いいさ。これで、あの子の愚痴を聞くことも無いだろうから……」もう一度大きな風が吹いたとき、白いハトは飛び立ちました。何処へ行くのかなど、決まっています。もしかしたら、自分と同じ羽の色のハトを探すのかもしれない。

もしかしたら、少女を蒼い空から、見守ってくれているのかも、しれません。

（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3719t/>

青い鳥と白い鳥

2011年10月9日02時45分発行